

マグダラのマリア

art & rivebank (展覧会テキストより) 東京 2005

古賀亜希子の“マグダラのマリア”は、スタンド・グラスから刺し入る光や、祈りを捧げる信者など、キリスト教教会の周辺で撮影された写真作品です。けれどもそこには、教会に充満する聖性を正面から見据えている気丈さはなく、むしろ何かいけなげなものを感じさせるようなおどおどとした気配が漂っています。ときには怯えているようにさえ感じられる彼女の態度は、彼女が単にドキュメンタリーとしてイメージを収集しているのではないということを示しています。古賀によれば、教会を撮影するようになったきっかけは、1人の女性との出会いだったといいます。聖なるものを求めようとする女性と、その女性に引き寄せられていく作家。古賀はやがて彼女から遠ざかっていくこととなりますが、彼女の作品の背後には、そうした2人の女性の迷いと弱さが静かに立ち上がってくるようです。

神になろうとするものの弱さ。そして神を崇めようとするものの愚かさ。彼女と私の、最も本質的なものがそこにはあった。・・・

こうした古賀の言葉には、彼女のこれまでの作品にも共通するものです。あるとき古賀は、幸せなただ中にいるという意識を過剰なまでに膨らませてしまった女性と出会います。

やがて、幾度となく彼女の自宅に足を運ぶうちに、古賀は、むしろ残酷な視線で彼女の幸せを眺めるようになります。前作、「ヘラの長く柔らかな髪」では、むせかえるような幸福の光景が、いつしか醜酔し、重たい毒気を放ち始めました。神という存在を幸福に置き換えたとき、そこには自身の立場に困惑しつつ、けれどもそのことに毅然として立ち向かおうとする作家の姿が浮かび上がってきます。

古賀の作品は、エイヤ＝リサ・アハティラやカットラグ・アタマン、エマニュエル・アンティレらの作品を連想させます。アハティラが神経症の女性たちと、アタマンが強迫観念に囚われた女性と、アンティレが謎めいた自分自身の夢と、それぞれ向き合いながら紡ぎだそうとした、弱々しく、けれどもそれゆえに切実な物語。古賀もまた、自身の経験を下敷きに、危うげな物語を立ち上げます。アハティラらの作品に比べれば控えめなスタイルではあるものの、けれどもだからこそ、誰もが逃れがたく縛られている、心の奥底の複雑を教えてくれるのかもしれない。古賀が見つめる幸福や神の裏側。もちろんそれは、古賀が出会った女性たちだけでなく、作家である古賀自身はもちろん、古賀の作品の前にたたずむ誰もが秘めているものなのです。

